

札幌保健医療大学

2026年度 一般選抜入学試験前期B日程

国 語

2026年2月5日(木)

1時限目 9:30~10:30

注 意

1. この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけません。
2. 解答時間は60分です。
3. 解答用紙の受験番号欄に受験番号を記入してください。
4. 問題冊子は1頁～12頁、解答用紙は1枚です。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。

□ 1 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

「存在の承認」¹が保証されれば、私たちは自由に生きることができません。あるがままの自分が否定されないのですから、それも当然のことでしょう。だから、「存在の承認」は自由の承認でもあるのです。そこに自由と承認の葛藤はありません。自由と承認の葛藤は、自由と「行為の承認」の葛藤であり、自由な行為に対する価値評価が問題になるときにのみ、顕在化するのです。

相互に自由を認め合い、「存在の承認」を保証し合うためには、一定のルールが必要になります。それは、個人の自由を侵害しないためのルールであり、他人に迷惑をかけない、傷つけない、といったような、誰もが納得できるようなルールでなければなりません。

このようなルールを措定^アするには、一定の価値基準を共有している必要があります。これは多様な価値観を認め合うことと矛盾するように思えるかもしれませんが、しかし、生き方や思想、信条、ライフスタイルなどの価値観が異なっている、善悪に関わる価値については、必ず一定の共通理解が可能です。

たとえば、人間は自由を求める存在であり、他人の迷惑にならないかぎり、誰もそれをジャマしたり批判することはできない、困っている人、苦しんでいる人は助けるべきだ、といったような考え方、価値判断は、たとえ文化や生き方、思想・信条が異なっている、ほとんどの人が納得するでしょう。こうした価値の共有に基づいたルールは、大勢の人が望んでいること、みんなの意志として共通理解されるはずなのです。

ルソーはこうしたみんなの意志のことを、「一般意志」²と呼んでいます。民主主義社会の基本は、お互いの自由を尊重し、侵害しないためのルールを決めるところにあります。自由を守るためのルールがなければ、それぞれが自分勝手な自由を主張し、他人の自由や迷惑など考えずに行動し、社会は混乱してしまうでしょう。そのルールの基準となるのが「一般意志」なのです。

このようなルールの基本にある価値観の共有は、ただ自由を守り、「存在の承認」を保証するだけでなく、認められるための行為の価値基準を明確にし、「行為の承認」³の可能性を広げてくれます。

他人に迷惑をかけることは当然であり、ルールを守っただけなら、特に評価されることはありません。しかし、困っている人を助けたり、苦しんでいる人を慰めれば、相手に感謝され、周囲の人たちにも称賛されるでしょう。これは、倫理的な行為の価値が認められたわけですから、「行為の承認」が充足された状態です。

また、陰ながら誰かを助けた場合、相手はこちらの善意に気づかないし、周囲も知らないで誰もほめてくれません。しかし、自分でその行為の価値を理解していれば、「自分はよいことをしている、役立つている」と信じていることができず、「どんな人でも『よい行為』だと認めるはずだ」と確信できれば、普遍的自己承認が得られるのです。

以上のことから、現代社会における「自由と承認の葛藤」の意味が見えてきます。

私たちの社会は民主主義の社会であり、自分なりの価値観で自由に生きることが認められています。お互いの多様なあり方を認め合うことで、自由を確保し、「存在の承認」を得ているのです。そこには自由と「存在の承認」（人権の承認）を保証するためのルールが設けられており、それは誰もが納得するような善悪の価値基準にもとづいています。当然ですが、この価値基準は、趣味や思想・宗教、生き方にまで口出しするようなものではなく、価値観の多様化や自由な生き方を否定しません。それは、自由を守るために最低限必要な善悪の価値基準⁴なのです。

したがって、この共有された価値基準に沿った行動は必ず評価されますし、「行為の承認」を得ることができます。もちろん、ルールを守っただけではなかなか評価されませんが、積極的に困っている人を助ければ、たいいていの人は称賛するでしょう。つまり、価値観が多様化し、承認の基準が不透明なこの時代にあっても、この善悪の基準に沿った道徳的な行為だけは、承認される可能性が高いのです。

価値観の多様化と自由への道は、一見すると、承認への欲望と矛盾し、自由と承認の葛藤、承認不安の増大は必然のように見えます。自由への欲望を満たせば承認への欲望が満たされず、承認を満たすには自由をギセイ^ウにするしかない。そう思っている人も多いでしょう。しかし、ルソーやヘーゲルが構想した民主主義社会の原理には、自由と承認が両立する道^エが、承認不安をカンワ^エし、自由に生きるための道が示されているのです。

（山竹伸二『ひとはなぜ「認められたい」のか』による）

問一 二重傍線部ア、エの漢字はカタカナに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 点線部①②の対義語をそれぞれ書きなさい。

問三 傍線部1「存在の承認」とはどういうことか。「〜こと。」に続く形で本文中から十五字で抜き出しなさい。

問四 傍線部2「一般意志」とはどのようなものか。最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 他人の自由を尊重しつつ、迷惑を考えずに行動するためのルール。
- ② お互いの存在を認め合い、相手の行為を認めるための可能性を広げるもの。
- ③ 多様な価値観の中で、お互いの自由を尊重し合うための基準となるもの。
- ④ 大勢の人が望んでいることを、共通理解として分かち合う生き方。
- ⑤ 価値観の多様性を認めたくえで、道徳的な行為を称賛する態度。

問五 傍線部3「『行為の承認』の可能性を広げてくれます」とあるが、「行為の承認」の可能性が広がるとはどういうことか。最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 行為の価値基準が明確になることによって、たとえ周囲の人たちが知らなかったとしても自分がその行為を肯定的にとらえられるため、普遍的に自己承認ができるようになること。
- ② 行為の価値基準が明確になることによって、相手に感謝されるような行為の価値を誰もが認めやすくなり、周囲の人々が行為に対する承認を与えやすくなること。
- ③ 行為の価値基準が明確になることや倫理的でない行為に対して価値が認められることによって、自らの行為について普遍的に自己承認ができるようになること。
- ④ 行為の価値基準が明確になることによって、困っている人を助けたり苦しんでいる人を慰めたりする行為が周囲に称賛されると理解できるようになること。
- ⑤ 行為の価値基準が明確になることによって、今まで誰にも評価されなかったささいな善意が肯定的にとらえられ、周囲の人たちに称賛されるようになること。

問六 傍線部4「善悪の価値基準」とはどのようなものか。その説明として適当でないものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 存在の承認を保証するための前提条件となるものである。
- ② 趣味や思想・宗教、生き方には言及しないものである。
- ③ 価値観の多様化や自由な生き方とは矛盾しないものである。
- ④ 判断の基準が不透明にならざるを得ないものである。
- ⑤ 文化や生き方、思想・信条には左右されないものである。

問七 本文の内容と一致するものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 私たちの社会では、生き方や思想などさまざまな価値観と、善意に関わる価値観が対立関係にあり、二つの価値観が両立することは不可能である。
- ② 私たちの社会では、一定の価値基準を共有しているため、一見すると矛盾するような承認への欲望と自由の行使を両立することができる。
- ③ 私たちの社会では、相手に感謝され周囲の人たちから称賛されると評価されることによって、自分らしく自由に生きる事が認められる。
- ④ 私たちの社会では、自らの行為の価値を理解して行動し続けていけば、どんな相手からもよい行為であると認めもらえるようになる。
- ⑤ 私たちの社会では、民主主義社会の原理に基づいた価値観の多様性によって自由と承認の葛藤が深まり、承認不安が増え続けていくことになる。

問八 次に示すのは、志賀直哉しがなおやの小説「小僧の神様」の一部である【資料】と、これを読んだ生徒たちが感想を述べている会話文の一部である。会話文中の に入る内容として最も適当なものを後から選び、番号で答えなさい。

【資料】

秤屋はかりの小僧の仙吉はお使いの帰り道に寿司屋の屋台を見てどうしても寿司を食べたくなかったが、手持ちのお金が足りず、つかんだマグロの寿司をもどして帰ってくる。それを見ていた貴族議員のAはどうかしてやりたかったが、そのときは勇気がなく何もできなかったことを後悔する。後日、Aは自ら寿司屋に手配し、仙吉が一人で腹一杯食べられるようにした。

Aは変に淋さびしい気がした。自分は先の日小僧の気の毒な様子を見て、心から同情した。そして、出来る事なら、かうもしてやりたいと考へて居た事を今日は偶然の機会から遂行出来たのである。小僧も満足し、自分も満足していい筈はずだ。人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、或喜あるびを感じていいわけだ。所が、どうだらう、此変このに淋しい、いやな気持きもちは。何故だらう。何から来るのだらう。丁度それは人知れず悪い事をした後の気持に似通って居る。

若もしかしたら、自分のした事が善事だと云ふ変な意識があつて、それを本統の心から批判され、裏切られ、嘲あざわらられて居るのが、かうした淋しい感じで感ぜられるのかしら？

生徒A 本文では、「困っている人を助ける」ことは周囲から価値が認められる行為だと言っているよね。Aは仙吉を助けたわけだから、「行為の承認」が得られるはずだよな。

生徒B そうであるなら、「普遍的自己承認」が得られる行為ともいえるよね。

生徒C でも、Aは「変に淋しい気」がしたんだよな。しかも「人知れず悪い事をした後の気持に似通って居る」とまで言っているよ。これはどうしてだろう。

生徒D それは、Aが本当に「困っている人を助ける」ことをしたという確信をもっていないからだと思うな。本文の言葉で言うと、 ということじゃないかな。

生徒E 自分の行為がよいことなのかどうか、確信がもてないんだね。この【資料】を読むと、明確な善悪の価値基準を設けることもなかなか難しいように感じるね。

- ① 「行為の承認」の可能性を広げられていない
- ② 行為が善悪の価値基準にもとづいていない
- ③ 自らの行為の価値基準が明確になっていない
- ④ 自己の内部で自由と承認の葛藤が起こっている
- ⑤ 行為自体が道徳的行為の基準を満たしていない

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夫の幼馴染み^なが、結婚祝いにうそ鳥のつがいを手作りの籠に入れて贈ってくれた。うそ鳥は雄と雌を一緒に籠に入れると鳴かなくなるため、別々の籠に入れて飼っていた。

ある晴れた日曜日の午後のことである。

彼は、狭い庭を鉤^{（注1）}の手に囲んでいる二階の窓から読み疲れた目をぼんやり下へ投げていて、妻が縁側に並べてある鳥籠の一つへ手を差し入れるのを見た。

その鳥籠の口は、そのとき庭の方に向いていた。部屋から縁側へ出てきた妻は、籠を覗き込んでなにか呟^{つぶや}き、そのまま籠の上に覆いかぶさるようにして、庭に向いた口から象の鼻のように伸ばした右手の先を差し入れたのである。

見ていて、危なっかしいな、と彼は思った。籠のなかに用があるなら、口を自分の方へ向ければいいのに。彼は声をかけてやろうかと思つたが、もう遅かった。妻の手の甲の下に思わぬ隙間ができたのだろう、籠のなかの鳥が一直線に庭へ飛び出るのが見えた。

あ、と妻はちいさな悲鳴を洩^もらして身を起こした。鳥籠ががたと鳴った。同時に彼も口を開けたが、声にはならなかった。彼は急いで階下へ降りた。

妻は、まだ驚きから醒めない顔で、両手の拳^アを顎の下に並べていた。

「ごめんなさい、逃がしちゃった。」

「見ていたよ、二階の窓から。どうも危ない恰好^{（注2）}だと思つてたんだ。」

逃げたのは雄鳥で、隣の雌鳥は動揺^{どうてん}してばたばたと籠のなかを飛び回っている。

「やっと馴^なれてきたのに……まさか逃げられるとは思わなかったわ。」

「馴れてきたところが危ないんだよ。野鳥はユダ^インがならないんだ。」

二人は、縁先から、扉際に並んでいる背の低い数本の植木の枝々^ウをタンネンに見たが、うそ鳥の姿は見当^{あた}らなかつた。あたりに耳を澄ましてみたら、啼^なき声もきこえなかつた。

「だけど、なんで籠のなかに手を入れたりしたの？」

「水の容器を取り出すつもりだったの。あんまり汚れてたから、替えてやろうと思つて。」

「だったら、籠を回して、口をこつちへ向ければよかったのに。庭の方へ向けたまんまじゃ、不自然だし、不用心だよ。姿勢が無理だから、どうしたって手のまわりに隙間ができる。」

³ 妻は、訝しそくに彼を見た。

「手のまわりって?」

「はつきりいえば、甲の下のところね。ほら、こんなふうに。」

彼は、さつき妻がそうしたように、空の鳥籠の上へ覆いかぶさるように身を屈めて、伸ばした右腕の先を籠の口から差し入れて見せた。案の定、上を向いた手のひらには、ただ押し上げるだけの格子戸がひとりで落ちて隙間を塞ぐが、反対側の甲の下には、確かに思いのほかの空間が生じる。

「ね? 鳥はここから飛び出したんだよ。」

すると、意外にも、妻は真顔でかぶりを振った。

「違うわ。そこから逃げたんじゃないの。」

彼は微笑した。

「いや……君はびつくりしてよく憶えてないんだろうけど、僕は上から見てたんだ。鳥は確かに君の手の甲の下から逃げたよ。」

「違うわ。それはあなたの見間違いよ。」

⁴ 思わず彼も真顔になって、妻を見詰めた。

「じゃ、どこから逃げたんだ?」

「籠の下の方からよ。」と妻はいった。「ちよつと手首が引っ掛かって、上の方だけが持ち上ったんだわ。」

その手作りの鳥籠は、床の部分と籠の部分とが二本の竹釘で繋がれていた。もし竹釘の一本が抜けて上の部分だけが持ち上げれば、籠全体が大きく口を開けることになる。

見ると、庭の方に向いた竹釘がいつの間にかそばに抜け落ちていた。抜いたのは妻でも彼でもないから、なにかの拍子に、ひとりでに抜け落ちたのだと思うほかはない。

そういえば、さつき妻が悲鳴を上げた直後に、籠ががたと音を立てたな、と彼は思い出した。すると、あれは斜めに持ち上った上の部分が元へ戻ったときの音だったろうか。いや、そうではない。箱ががたと鳴ったとき、妻はすでに身を起こしていた。妻は思わず鳥を追

いかげようとして、ちよつと籠に躓つまずいただけだ。

彼は、やはり自分の目を疑うことができなかつた。鳥は間違まちがいなく、妻の手の甲すれすれに飛び出したのである。それをこの目ではつきり見たのだ。籠は決して斜めに持ち上つたりなどしなかつた。

「ねえ、君」と、彼は押し黙っている妻にいった。「僕は君をとがめているんじゃないんだよ。僕は怒つてなんかいやしない。だから、正直にいえよ。」

「正直にいつてるわ。鳥は籠の下から逃げたのよ。」

妻は平然とそういつたが、嘘うそをついているのは明らかであつた。彼には妻という人間が急にわからなくなつた。二年前から親しんできて、ようやく結婚まで漕こぎつけた相手が、全く未知5の、虚偽5に満ちた女に見えてきて、彼は暗澹あんたんとした。

ところが、夕方近くになつて、逃げたうそ鳥がいつの間にか戻つてきているのに妻が気づいた。そのとき彼は浴室にいたが、急いで腰にタオルを巻きつけて縁側へ出てみると、なるほど妻の指さす庭木の枝に喉の朱色がちらついている。例の口笛もきこえていた。

「珍しいな。逃げた野鳥が舞まい戻るなんて。」

「やっぱり雌鳥が恋しいんだわ。なんとか誘おびき寄せましようよ。」

二人は相談して、縁側のガラス戸を十センチほどの隙間だけ残してそろそろと閉め、その隙間の内側に雌鳥の籠を移して、彼は外でタイキオキした。予想通り、庭の雄鳥は口笛を鳴らしながらすこしずつ雌鳥の籠に近寄つてきて、やがてガラス戸の隙間から縁側へ入つた。彼は急いで庭へ回つてガラス戸を閉めた。

「啼かなくなるとかいつてたけど、別々にしておくのは可哀相かわいそうよ。やっぱり夫婦は一緒に暮らすべきだわ。」

妻はそういつて、捕えた雄鳥を雌鳥の籠に入れた。

うそ鳥の啼き声はそれきり絶えたが、夫婦は何事もなかつたように暮らした。

(三浦哲郎『うそ』による)

注1 鉤の手…直角に曲がっていること。

注2 うそ鳥…鳴き声が口笛に似ていることから、口笛を意味する古語「うそ」が名前の由来と言われている。

問一 二重傍線部ア、オの漢字はカタカナに、カタカナは漢字に直しなさい。

問二 傍線部1「妻が縁側に並べてある鳥籠の一つへ手を差し入れる」とあるが、妻はなぜ、鳥籠に手を差し入れたのか。「ため。」に続くように文中から十字以内で抜き出しなさい。

問三 傍線部2「どうも危ない恰好だと思つてた」とあるが、具体的にどのような恰好だったのか。一文で抜き出し、最初の五字を書きなさい。

問四 傍線部3「妻は訝しそくに彼を見た」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 夫の遠回しに責める言い方が釈然としなかったから。
- ② 夫の人を見下したような発言に違和感を持ったから。
- ③ 夫の言っていることに納得がいかず、不審に思つたから。
- ④ 夫の理屈っぽい考え方を煩わしく思つたから。
- ⑤ 夫のわかつたような言い方が癢しやくに触つたから。

問五 傍線部4「思わず彼も真顔になって、妻を見詰めた」とあるが、この時の「彼」の心情として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 鳥を逃がして悲しんでいる妻を慰めようと思ったが、鳥を逃がしたことをなんとも思っていない薄情さに呆れている。
- ② 勘違いをしている妻を傷つけないように優しく接していたが、意外にも妻が強く反論してきたので驚いている。
- ③ 自分の失敗を隠そうとしている妻をとがめないようにしていたが、重ねて嘘をつく強情さに言葉を失っている。
- ④ あどけない妻の言動をほほえましく思っていたが、自分に反抗してくる態度を苦々しく感じ始めている。
- ⑤ 「見てた」という自分の言葉を否定する妻の態度が理解できず、これ以上話をしても無駄だと思っている。

問六 傍線部5「全く未知の、虚偽に満ちた女に見えてきて、彼は暗澹あんたんとした」とあるが、ここでの「彼」の心情を説明したものとして最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 自分の失敗をごまかすために平然と嘘をつく妻を目の前にして、今までの妻の言動すべてが信じられなくなり、結婚は失敗だったと後悔している。
- ② 従順で素直だと思っていた妻が、意外にも強情で自分の正しさを言い募る人物だとわかり、自分の人を見る目のなさを痛感している。
- ③ 妻が平気で嘘をつく女だということは全く知らなかったので、本当の姿を目にして愛情がすつと冷めると同時に憎しみが生まれはじめている。
- ④ 思いもよらない妻の別の面を見せられたようで、妻とのこれからの結婚生活に影が差したように感じ、暗い気持ちになっている。
- ⑤ 今まで見たことのなかった妻の姿を見たことで、この先も色々な嫌な面を見るかもしれないと思い、これ以上一緒に暮らすことが耐えられなくなっている。

問七 本文の表現についての説明として最も適当なものを次から選び、番号で答えなさい。

- ① 会話文が多いことで二人の心情が読み取りやすくなっており、少しずつ気持ちが変わっていく様子がわかる。そして、鳥が逃げる瞬間から始まる夫婦のささいな食い違いの繰り返しだが、家庭生活の崩壊を予感させている。
- ② 一つの出来事に対する「彼」と妻の見方が違うことを通して、二人の性格の違いを浮き彫りにしている。また、「夫婦は何事もなかったように暮らした。」というところから、結婚生活は、ものの見方の違いや、疑惑など、何があっても穏やかに続くものだけというところがわかる。
- ③ 「彼」と妻の会話や「彼」の心情は細やかに描かれているが、妻の言葉の真偽は明確な説明がない。結局妻に対して違和感を覚えたものの、何事もなく二人の生活は続いていく。親しい家族でも関係性が揺らぐ一瞬があることを描いている。
- ④ 鳥が逃げたときの様子を繰り返し描写することで、何が真実なのか、読者にはわかるようになっていく。また、戻ってきた雄鳥を雌鳥と一緒に籠に入れる妻を描くことで、妻の「彼」に対する愛情を読み取ることができる。
- ⑤ 逃げた雄鳥と籠の中を飛び回る雌鳥の描写が、「彼」と妻の今の心情を暗示している。さらに、戻ってきたが一つの籠に入れたために啼かなくなってしまう雄鳥は、一緒に暮らしながらも妻には何も話さなくなる「彼」の姿そのものである。

